

---

# 羽田のハヤごと一話完結集

羽田

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

羽田のハヤごと一話完結集

### 【コード】

N8130P

### 【作者名】

羽田

### 【あらすじ】

羽田が書いたハヤテのごとく！の一話完結をいくつか載せます。

これらは全て以前ひなたのゆめ様に投稿させていただいた作品です。

## V S 綾崎颯

ここは、白皇学園の校庭一人の青い髪の執事服の少年を三人の女子生徒が睨みつけている

三人のうち一番背の高い黒髪の少女が執事に向かって言う

「なぜ命の恩人である三千院家の人たち殺したんだ？」

「……」

少年は、何も答ええない

次に、水色の髪をオールバックにした少女が問う

「じゃあ白皇の生徒を襲ったのは何故だ？」

「……」

少年は、また何も答ええない

水色の髪の少女が我慢しきれずに叫ぶ

「もういいいくぞ二人とも」

「「わかった(うん)」」

三人は戦闘態勢にはいる

いつの間にか黒髪の少女の右腕が大砲になっている

「一ツ星神器 鉄」

大砲から弾が発射され少年にむかい飛んでいく

少年は、それをかわす

「これならどうだバレッティーゼフレア」

水色の髪の少女が身に着けている腕輪についた黒い石が光る

少年がいる場所が爆発した

少年は、なんとか かわすだが、砲弾と爆発が容赦なく襲ってくる

「クッ」

だんだんかわすのがきつくなってくる

「「今だ」」

三人の攻防を見ていた紫髪の少女が二人の合図で動く

「殲景千本桜景敵」

空から数えきれぬほどの刀が降ってくる

砲弾、爆発、降ってきた刀この三つにより砂煙が上がる

「「「やつたか?」「」」

砂煙がはれ、その中にいた少年が立ち上がる

それを見て黒髪の少女が言う

「もう一度だ」

三人が構える

それを見て少年は、大きく息を吸い

「いいかげんにしてください!!突然呼び出されたと思ったら殺す  
気ですか!!」

数十分前、白皇学園校庭

「なんですか話って」

「「「まあまあちょっとここに立って何を言われても無表情で何も言  
わずに居てくれるだけでいいから」「」」

「いやです」

即答して帰ろうとした

「「「これを見てみたまえ」「」」

一枚の紙を手渡される

ハヤテへ

三人組に協力するようにもし、しなければ借金が倍になるぞ

三千院ナギ

(ええーなにこれなんでお嬢様がこんなに乗り気なの協力しなければ借金倍ってシャレにならねー)

「きよ、協力させてもらいます」

「ただ立ってるだけでいいって言ったじゃないですか、それが砲弾が飛んでくるし地面が爆発するし最後の刀は当たったら即死レベルでしたよ」

「おもしろかったでしょ 今、ソ が開発してる誰でも漫画のキヤラになれるおもちゃだよ」

「ちなみに鉄は、使い手に撃つ衝撃がほとんどかからなくて軽い装着型小型大砲。

バレットーゼフレアは、リモコンで起爆できる地雷。千本桜は、上空30mから狙った場所に刀を降らせるメカだよ」

「兵器並みの殺傷能力と性能ですね」

「まあそのおかげで迫力あるおもしろ動画が撮れたじゃないか」

「美希の言う通りだ、楽しかったよハヤ太君」

三人は、そう言って去ってゆく

その後屋敷に帰ると失神程度じゃすまない電流を放つ手袋をした主に襲われた借金執事。

## 綾崎颯の中学時代

これは綾崎ハヤテがまだ中学生の頃のお話……

「げっ！綾崎が居やがるぜ」

「ホントだな」

ハヤテと敵チームになった男子が言う。

「私、綾崎君と同じ班よ」

「ホント？綾崎君って……」

「そうなのよね」

調理実習でハヤテと同じ班になった女子とその友達がヒソヒソと話している。

「おい綾崎、もう逃げられねーぜ観念するんだな」

「昨日みたいに都合良く邪魔が入ると思うなよ」

「そうだが、邪魔の入らない所でゆっくりと話し合おうじゃねーか」

ハヤテを数人の男子が人気のない所に連れていく。



「ほら、お前が持てよ」

「そつだ、これを持つのはお前がお似合いだぜ」

ハヤテの同級生が持っていた物をハヤテに押し付ける。

「あれが綾崎君？」

「きつとそつよ」

「あれが例の…」

廊下でハヤテとすれ違った上級生の女子が言う。

「大丈夫だ綾崎、お前は悪くない、先生が何とかしてやるから安心しろ！」

「なるほど、アナタ達の話は分かりました、それで綾崎君が一人で…」

ハヤテの置かれた状況に教師達も頭を悩ませる。

これは綾崎ハヤテがまだ中学生の頃のお話……

「げっ！綾崎が居やがるぜ」

「ホントだな」

「こりゃ勝てねーな」

「ああ、アイツ運動神経、良過ぎだもんな」

「おーい綾崎、お前少しは手加減しろよなー」

「そうだぜ、前みたいにGKになって全部のシュート止めたり、一人で10得点とか止めてくれよ」

ハヤテと敵チームになった男子達が言う。

「私、綾崎君と同じ班よ」

「ホント？綾崎君って……」

「そうなのよね、綾崎君と一緒にだと楽なんだけど、作る料理が凄過ぎて自信無くすのよね」

「ホントそうよね、私達と同じ材料、調理法のはずなのにまるで味が違うもんね」

調理実習でハヤテと同じ班になった女子とその友達がヒソヒソと話している。

「おい綾崎、もう逃げられねーぜ観念するんだな」

「昨日みたいに都合良く邪魔が入ると思うなよ」

「そうだぜ、邪魔の入らない所でゆっくりと話し合おうじゃねーか」

「今日こそは我が陸上部に入部してもらおうぜ」

「昨日はバスケット部が邪魔しやがったからな」

「今日は後輩達が各運動部を警戒してるから、ゆっくりと話が先輩大変です！家庭科部がやってきました！！」

「！？何！クソツ運動部を警戒し過ぎて文化部の警戒が薄れていたか」

ハヤテを数人の男子が人気のない所に連れていく。

「ほら、お前が持てよ」

「そつだ、これを持つのはお前がお似合いだぜ」

「そつだぜ、お前の最後のリレーでのごぼう抜きや騎馬戦での活躍がなきゃウチのクラスの運動会での優勝はなかったからな」

「やつぱり他の100メートル走とか出た競技全部一位だったのも大分大きかったよな」

「だからこの優勝トロフィーはお前が持って写真に写れよ」

ハヤテの同級生が持っていた物をハヤテに押し付ける。

「あれが綾崎君？」

「きつとそつよ」

「あれが例のうちの中学で一人ずば抜けて運動神経がいい子」

「それで毎日運動部に勧誘されて大変らしいわよ」

「なにしろ運動部同士が邪魔しあって勧誘がうまくいかないらしいし」

「調理実習の時の料理も凄かったらしいわよ」

「そつそつ、それで家庭科部もあの子のこと狙ってるんでしょ」

廊下でハヤテとすれ違った上級生の女子が言う。

「大丈夫だ綾崎、お前は悪くない、先生が何とかしてやるから安心しろ！」

体育教師はハヤテの入ったチームが必ず勝ってしまうほどの高すぎる運動神経に

「なるほど、アナタの話は分かりました、それで綾崎君が一人で……」

家庭科教師はハヤテの班がハヤテが飛び抜けて料理が上手いため、班員が後片付けしていなかった事に頭を悩ませる。

## ハヤテのごとくでホームクルス

セントラル中心部（地下）

アメストリスのセントラル中心部地下深く、本来なら人などいない筈のこの場所に老人と金髪の少女が居る。

「アテネよ、例の計画は何処まで進んでいる？」

老人の問いかけに少女が答える。

「帝お父様、進んでる訳ないじゃないですか、全く長く生き過ぎてボケましたか？」

アテネと呼ばれた少女は呆れたように言う。

「なんじゃその目は！ 儂はお前の産みの親じゃぞそんなボケた老人を見る様な眼で見るな！ だいたいお前達<sup>ホームクルス</sup>人造人間7人の力なら今頃計画の最終段階まで進んでいてもおかしくないじゃろうが！」

帝が叫ぶ。

「だいたいあの人達が真面目に働くわけ無いじゃないですか、私達の産みの親なんですからそれくらい分かるでしょう。」

「リオールで内乱を起こさせる様に言ったマリアとタマは何しておる。」

「その二人は…」

リール

茶色の髪の女性と白い虎が歩いている。

「聞いていた程教祖様っていうのも人気無かったな。」

「そうですねー、あれじゃあ予定していた計画は上手くいかなそうですね。」

「せっかくここまで来たのに無駄足だったな。」

「そうですね、いくら私がピチピチといっても疲れました。」

「ピチピチって百年以上生きてる癖」

ドス！

マリアの指先が鋭利な刃に変わり、タマの近くに刺さる。

「私の“最強の矛”受けてみます？」

「色欲のラスト」 マリア

「す、すいません。」

謝ったタマの姿が虎から猫に変わり、そのまま細い路地に逃げる。

「嫉妬のエンヴィー」 タマ

噂程レト教には熱狂的な信者が居なかつたみたいで、計画は失敗だそうですね。」

「トンネルを掘らせているナギは何をしておる？」

「あの子なら…」

地下

「全く私がトンネルを掘るなんてめんどくさい事するわけ無いだろう、全くあのクソ爺は何を考えているんだか。」

13歳程の金髪の少女はトンネルを掘らずに漫画を読んでいる。

「怠惰のスロウス」 ナギ

という具合にトンネルを掘らずに引きこもって漫画ばかり読んでいます。

「それなら歩は何しておる？」

「あの子なら…」

ドラクマ

普通っぽい少女が肉まんを持って歩いている。

「うーんと次はシン国に行こうかな？」

「暴食のグラトニー」 歩

こんな風に色々な国で食べ歩きをしています。」

「なら雪路は？」



「あの人こそ働くわけ無いでしょもちろん…」

アメストリス東部

「待てー食い逃げ！」

店の店主が女性を追っている。

「今度払うわよー！！！」

ドゴー！！

「ぐふっ」

逃げていた女性、雪路が倒れる。

「いきなり何すんのよー！！！」

「それはこっちのセリフよ！貴女は何回食い逃げしたりお酒を飲んで暴れば気が済むの？」

「毎回止めに来る私達の身にもなって下さい。」

「あ、あんた達は…。」

雪路はマズイという顔をする。

「桂大佐だ。」

「東の番人」 桂ヒナギク

「春風中尉も居るぞ。」

「鷹の目」 春風千桜

遠巻きに見ていた人々から歓声が上がる。

「こつなったら力づくでいくわよ。」

雪路の手が黒くなっていく。

「強欲のグリード」 雪路

「遅い！」

ドゴ！バキ！ドゴ！

「ぐあー！」

雪路はヒナギクに木刀でボコボコにされる。

「貴女の“最強の盾”は強力だけど、全身を覆うまでにはほんの少し時間がかかるからその間に倒せば問題ないわ。」

「これに懲りたらもう私達の手を煩わせないで下さいね。」

「行くわよハル子。」

「はい、大佐。」

ヒナギクと千桜が立ち去ると、雪路が起き上がる。

「あいたたたー、もうここも限界ね、次は何処に行こうかしら？  
中央はお父様や他の兄弟に会ったらめんどくさいし  
南部は「紅蓮の錬金術師」の冴木ヒムロが居るし、  
北部は「剛腕の錬金術師」の瀬川虎鉄が居る、  
となると西部か、確かにあそこに居る「白銀の錬金術師」の綾崎君  
が一番お人好しで楽なんだけど、キレたらなにするか分かんないし  
なあー、どうしようかしら。」

という具合に、あっちこっちで無銭飲食などをして痛い目に遭っています。」

「じゃあ、野々原は奴なら。」

「あの人は…」

セントラル 大総統府

「67…68…69…70…」

「スピードを緩めるなー！」

「皆さん頑張っていますね。」

アメストリス国軍最高機関である大総統府に兵士たちの素振りやマ  
ラソンの声が響く中、  
左目に眼帯をした青年が現れる。

「『大総統！』」

「その調子でこの国を守る為に頑張ってくださいね。」

「憤怒のラース」 野々原楓

「了解しました大總統!!」

野々原さんが大總統になつてから鍛え上げた屈強な兵士たちのおかげで、東のシン、北のドラクマ、西のクレタ、南のエルゴどれもこのアメストリスには攻めてこようともしませんしこの国内部の犯罪の発生率も激減しました、流石野々原さんですね。」

「そこまで平和だと、アメストリスを作り野々原を大總統にした意味が無いんじゃないか。」

「いいじゃないですか、平和なんですから。」

アテネがそう言う。

「儂がわざわざアメストリスを作ったり、お前達にトンネルを掘らせたり、内乱や戦争を引き起こす様に命令した理由が分かっているのか？」

「国土錬成陣を作る為ですよ。」

「約束の日まで時間が無いというのに、全く計画が進んでおらんじやないか!」

「あの人達に、期待したのが間違いなんですよ。」

「じゃあ、お前が働かんか、お前は儂が最初に生み出したホームクルス、プライドじゃろうが!」

「嫌です、何で私があの人達の代わりに働かないといけないんですか！」

「傲慢のプライド」 アテネ

「何で誰一人として儂の為に働いてくれんのじゃ。」

帝が悲しそうに呟く。

コンコン

「失礼します。」

帝とアテネが居る地下室に誰かが入ってくる。

「貴様は確か愛歌じゃったか？」

「はい、軍法会議所勤務の愛歌と申します。」

少将 霞愛歌

「何の様じゃ？」

「この地下室を使っている家賃を頂きにまいりました。」

「家賃じゃと、今は忙しいんじゃ今度にしてくれ。」

「そう言われましても、今頂かないと私も困ってしまいますし。」

「ええいつるさい！儂等は忙しいといっておるうが、これ以上ここにおるなら死んでもらうぞ。」

帝が纏う空気が変わる。

グシャ！

「ですから家賃を頂きたいのですけど。」

愛歌に襲いかかり返り討ちにあつた帝が地面に倒れる。

「後1週間待って下さい。」

「最初からそう言ってくれば良いんですよ。」

「スイマセンでした。」

「1週間後また来た時に払ってくれなかったら覚悟して下さいね。」

「分かっています絶対に用意しておきます、お手数掛けてスイマセン。」

はたして国土錬成陣が完成するのか？頑張れ帝、負けるな帝、泣くなお父様、きっと良い事あるさお父様。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8130p/>

---

羽田の八ヤごと一話完結集

2011年1月4日02時21分発行